

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農業機械テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農業機械情報。

Small is beautiful in bailing world オランダ



オランダの作業請負業者「ユニコム・オースト社」では、試験的に用いたペーラとペールラップを使い2005年には5000個以上のペールを作った。

スター農機社製のペーラ本体は、オランダのアイバーヘン市にある「Pier社」がヨーロッパに輸入している。オプションとして切断刃を選択でき、価格は3万8750ユーロ（約560万円）。

ペール作りでは小は美なり



世界のほかの地域と同様に、農場経営規模の拡大はオランダでも進行している。しかし、小規模農家のすべてがなくなりかけているわけではない。大規模農家とは違う経営手法で存続している。こうした農家が経営する面積は小さく、その多くは兼業農家であるため農作業の時間は限られている。こうした小規模農家や牧場主が扱える農機具の大きさには限界があり、よく問題とされる。給餌や寝わらにはペールが必要だが、大型のペーラを使つてのペール作りは始めから選択肢に入らない。

ハーレ市周辺で農作業の請負業をしているユニコム・オースト社ではこの点に着目した。同社では、日本のスター農機社製の小型ラウンドペーラの後ろに、小型のペールラップをつなげて作動させる。オースト社が作るラウンドペールは扱いやすい大きさで、圃場で手押し車に載せて搬送でき、手で押して転がすこともできる。円の面の直径は90cm、幅は85cm。ペール材質となる作物の密度と湿度によって変わるが、重量はおよそ75kgから100kg。

Filed ingenuity makes it work アメリカ



メイソン・ディクソン農場のクラス社製「ジャガーSP」フォーレージハーベスタが、コンテナ下にあるクローラ車台を入れ替える。満杯のコンテナから空のコンテナにハーベスタを付け替える時間は約50秒だそうだ。



前輪に幅広タイヤをはかせ後部をクローラにしたフォーレージハーベスタなら水浸しの地面でも進める。さもなくば、ウェットスーツに水中マスク、シュノーケルが必要などところ。

水浸しの圃場での究極の解決策



米国・ペンシルベニア州ゲティスバーグ市にあるメイソン・ディクソン農場では、技術面での解決策の考案も日常的業務の一つとなっている。一例として、水浸しの圃場で牧草を運搬するという課題をどのように克服したか紹介する。

経営陣がまず試したのは、クラス社の「ジャガー」フォーレージハーベスタに、足回りをクローラに変えた改造トレーラを連結させての運転だった。「踏圧はおよそ0.42kg/cm²で、人間の足裏の踏圧とほぼ同じだ」と、同農場のリチャード・ウェイブライト氏は説明する。

クローラは圃場では高性能を発揮するものの、長さ12mあるトレーラを道路上で牽引するには問題があった。農場の技術担当者も、再び製図板に向かうことになった。その結果出来あがったのが写真にある機体一式だ。

これが究極の解決策だとメイソン・ディクソン農場では考えている。フォーレージハーベスタがトレーラのコンテナを満杯にすると、ハサミのように中央の支点で2本の棒が交差する構造をもった仕掛けでコンテナを持ち上げ、足回りのクローラの付いた車台と分離させる。すると、フォーレージハーベスタがコンテナの下からクローラの車台を引き抜く。さらに、普通トラックが今度は車輪の付いたシャーシをコンテナ下部に戻し、重さ30トンの積荷を保管場所まで運搬する。満杯のコンテナから空のコンテナへとフォーレージハーベスタが連結先を換えるのは約50秒で済むという。ウェイブライト氏は「ここで開発した農機具を自分たちで製造していこうとは思わない。だが、試作品を作りその設計アイデアをメーカーと共有できたなら、皆が利益を得るとわかった」と話す。トレーラの車台交換のアイデアも、メーカーとの共同開発が十分実現しうるケースだ。



Brands remain pivotal to CHN business
オーストラリア

CNH社のブランド政策に変更なし



CNH社の社長兼CEOのハロルド・ボヤノフスキー氏は、ブランド並存の方針を堅持すると話す。

「ケースとニューホランドの2つのブランドを並存させるCNH社の方針は変わらぬ」
確かにこれが、同社の社長兼CEO（最高経営責任者）のハロルド・ボヤノフスキー氏の自論だ。ブランドカラーが「赤の」ケースと「青の」ニューホランドの両方から農家が機械を選べるといふCNH社の営業戦略には、専門家や一部の農家から絶えず疑問の声が上がっていた。だが、同社の現在とるべき道は有名な両方のブランドを「さらに活性化させる」ことにある。
「ブランドはわが社の経営の基礎であり柱だ」と、ボヤノフスキー社長は語る。2つのブランドが統合されてからおよそ5、6年が経ったが、昨年の同社の純益は30%増の1・63億USD（約180億円）だった。

It's show time again in South Africa
南アフリカ

見本市でのびっくりショー

アグリコ社の4+400型トラクタは、15本のツメを持つサブソイラをけん引して、深さ600mmまでの心土の粉碎作業を軽々とこなす。



ナンポ・ハーベスト・デー2006に会場する人は、あつと言わせるこのような展示がまた見られることをさぞ期待していることだろう。

の過重を自動的に調節する。

駆動源はデトロイト・ディーゼル社製の14ℓエンジン。アリソン社の6速トランスミッションを通して、サイズ710/70R40の大型ラジアルタイヤ8本へ駆動力を送る。さらに、このトラクタにはアグリコ社独自の油圧式耕深制御システムが備わっている。この制御システムがトランスミッションの動きの理論値と対地速度レダによる実測値を比較して、車輪が空転したとき機体後部の過重を自動的に調節する。

2005年の見本市のハイライトの一つが、アンドラグ・アグリコ社による巨大な4+400型トラクタの実演展示だった。400kW/544馬力の強力パワーを誇るこのトラクタは、爪が15本あるサブソイラを牽引し、およそ600mmまでの深さの心土を破碎してみせた。



毎年恒例の「ナンポ・ハーベスト・デー農業機械・製品見本市」が5月16日から19日まで、南アフリカ自由州のボーサビルで開催される。
この見本市に出展する農機業者にとって、開催地が南アフリカ